

## 2014年度 学生授業アンケート報告書

### < 1. 学生による「授業評価」について >

2014年1月から2月にかけて、教育学部・教育学研究科「自己点検・評価委員会」では、本部局が2014年度に提供した授業にかんする調査、「授業評価アンケート」を実施しました。学部生・院生のみなさんは、授業をどのように選択、活用しながら、それぞれの目標に向けた学習に役立っているのでしょうか。本報告書は、今回のアンケート回答から得た結果をまとめ、そこから推察される授業の実態を考察したものです。これらをみなさんにフィードバックすることによって、今後の教育研究活動をいっそう充実させる一助となることを目的としています。

教育学部・教育学研究科では、2005年度から継続的に授業評価アンケートを行ってきました。これまでは、数多くの講義・演習・ゼミナール等の中から、いくつかの授業を選択してアンケートを実施する方法がとられてきました。2012年度までに、すべての科目群の評価アンケートを一巡させ、2013年度にはアンケートの質問項目等の検証を終えました。その結果は、FD活動の一環として授業担当教員全員へすでにフィードバックされています。

そうした経緯をふまえ、2014年度の授業評価アンケートでは、**本学部・研究科が提供する「すべての科目」**を評価の対象としました。学部生・院生の多様なニーズに応えるべく、授業内容や方法、位置づけをより広い視野から俯瞰、検討するためです。今回の調査では、学部生・院生のみなさんが多くの授業全体を見渡し、相互の関わりを見出しながら効果的な授業選択を行ってほしいとの願いから、とくに「シラバスの活用」に重点を置いた質問を行いました。

2014年度の授業評価は、以下の手順で実施されました。

- ① 2015年1月上旬から2月上旬にかけて授業担当者（複数担当者の場合は代表者）に、自己点検・評価委員会委員長名でアンケート調査実施協力を、口頭および文書送付により依頼した。
- ② 2015年1月上旬から、授業担当者の協力を得て、2月上旬までにアンケートへの回答を得た。アンケート回答期間は2015年1月7日から2月10日であった。

その結果、総回答者数はのべ2310人にのぼりました。なお、回答を依頼した学部生・院生は、教育学研究科・教育学部に所属する者だけでなく、他学部・他研究科に所属する学部生・院生も含まれています。

## ＜2. アンケート内容の結果と分析＞

今回実施したアンケートは、2つの大項目、およびそれに関連するいくつかの小項目で構成されていました。それぞれについて、あてはまる回答を選択肢から選ぶマークシート回答方式としました（資料参照）。

### 【質問1】 シラバスの活用状況について

- (1) シラバスを活用（使用）しましたか
- (2) シラバスの情報は十分なものでしたか

### 【質問2】 学習時間について

- (1) 当該科目の授業出席回数
- (2) 授業外学習時間

その他、アンケート内では「授業の感想」という自由記述欄を別に設け、当該授業についてよかった点、勉強になった点などを回答者が自由に記載できるようにしました。この項目への回答については、アンケート実施後、各授業担当教員にただちにフィードバックをしています。各教員には KULASIS や個別面談を通して学部生・院生のみなさんに直接返答していただいていますので、本報告書では省略します。本報告書では、【質問1】と【質問2】の分析結果を項目ごとに示し、そこから読み取れる実態を紹介していきます。

### 【質問1】 シラバスの活用状況について

【質問1】では、「(1) シラバスを活用（使用）しましたか」と、「(2) シラバスの情報は十分なものでしたか」の質問が提示されました。前者について「はい」と答えた者には「何に活用したか」を5つの選択肢から（複数回答可）、後者について「いいえ」と答えた者には「活用しなかった理由」を5つの選択肢から（複数回答可）回答するよう求めました。

#### (1) 「あなたは、シラバスを活用（使用）しましたか」

この設問に「はい」と答えた者、すなわちシラバスを活用（使用）した者は約7割（69.2%、のべ数 1423人、無効回答を除く）にのぼりました。つまり、多くの学部生・院生が、何らかの形でシラバスを参照していたといえます。何に活用したかについては、「科目選択・履修登録に活用」を挙げた者が8割を超え、他の選択肢「試験・レポートに活用（10.5%）」、「受講にあたり授業中などに活用（4.4%）」、「予習・復習に活用（2.0%）」、「その他（0.3%）」を大きく引き離していました（図1）。

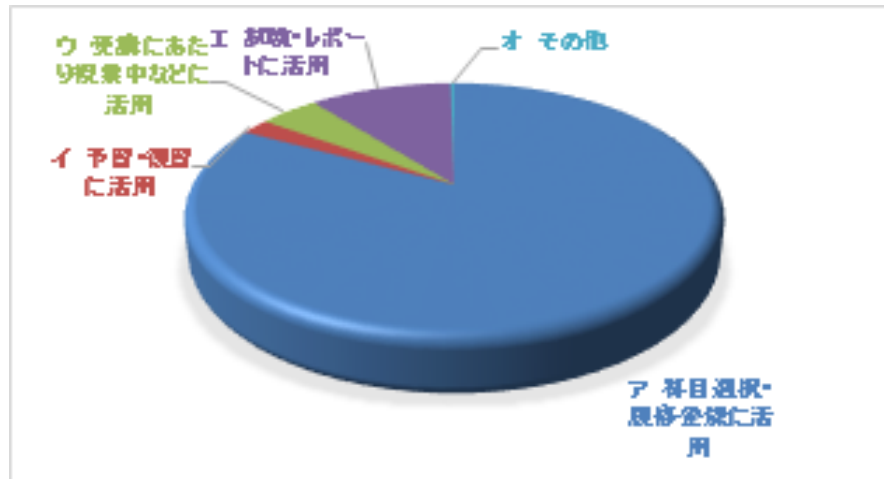


図1 シラバスの活用方法 (全体)

つぎに、上記を学年別に分析しました(図2)。「活用(使用)した」と答えた者の割合は、学部1回生と修士課程の院生で比較的低いことが伺えます。この理由についてはさらなる調査、検討が必要ですが、学部1回生の段階では履修可能な専門科目が限られているため、教育学部・教育学研究科のシラバスにもとづいて授業を選択する機会が他の学年ほど多くなかった点が考えられます。修士課程の院生についても、必修に指定されている授業や大学院修士課程に履修すべき科目選択のパターンがある程度決まっているため、授業選択の余地が相対的に少なかったことが理由として考えられます。

対照的に、学部2回生以上に在籍する学生については、授業を選択する機会が多いため、授業選択時の参考情報としてシラバスの記載内容を活用してケースが多いようです。博士後期課程の院生については、履修義務がない中で授業を選択しているという背景を考慮すると、各自の研究活動の進捗にあわせ、シラバスで授業内容を丁寧に検討しながら受講の可否を検討しているようです。

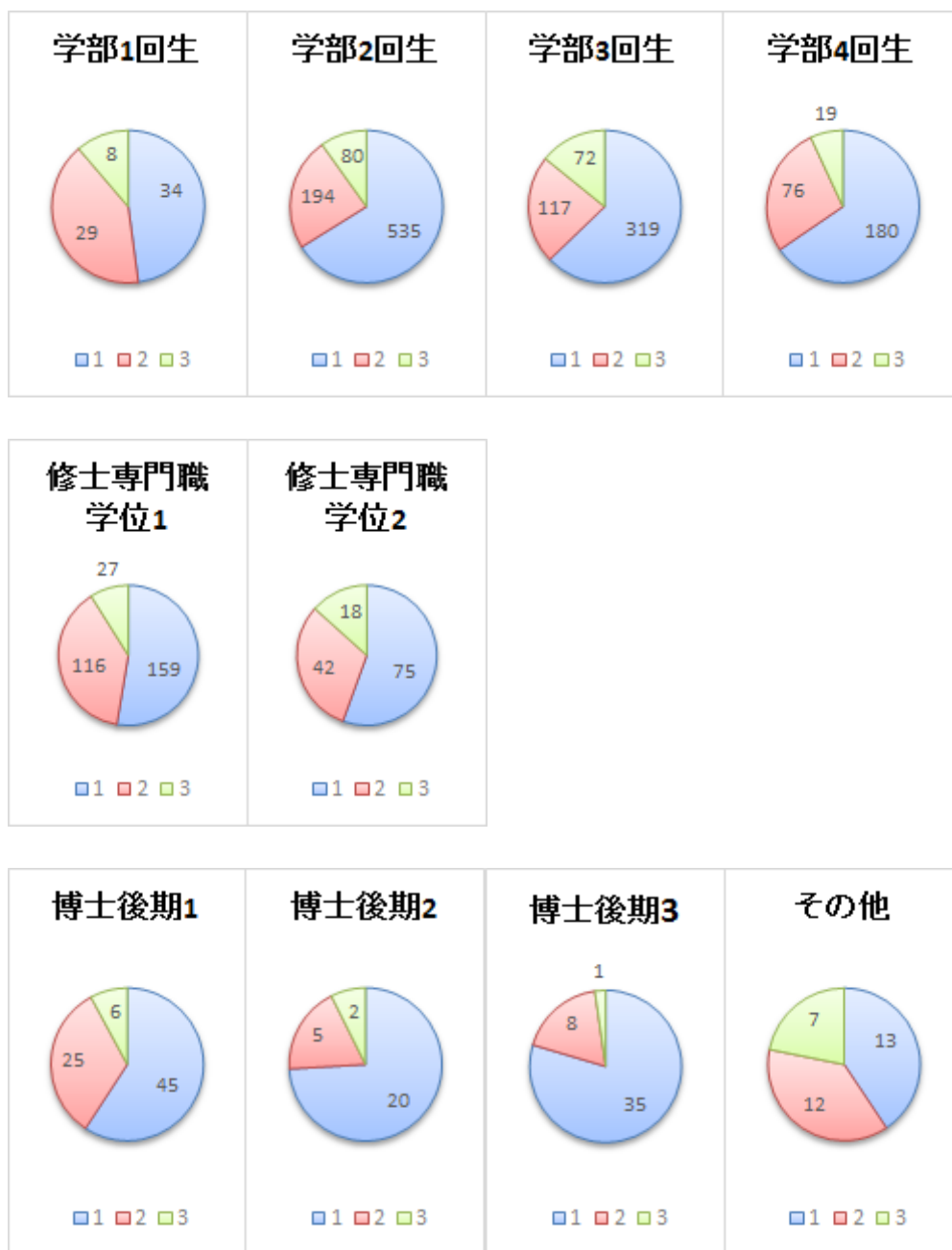


図2 学年ごとの「シラバスの活用度（数字は回答人数）」。  
 1 = 活用した, 2 = 活用しなかった, 3 = 無効回答。

さらに、「シラバスを活用した」と回答した者に対し、「何に活用したか」を尋ねたところ、どの学年も「科目選択・履修登録」のためという回答が圧倒的に多いことがわかりました（図3）。ただし、学部1回生については他の学年と比べるとその割合は3分の2程度と低く、かわりに「試験・レポート」に活用したとの回答が目立ちました。これは先述のとおり、1回生に担当されている専門科目の数が限られていることが直接的に影響し

ているとみられます。博士後期課程1回生も、学部1回生と同様の傾向がみられますが、その理由については現時点では不明となっています。

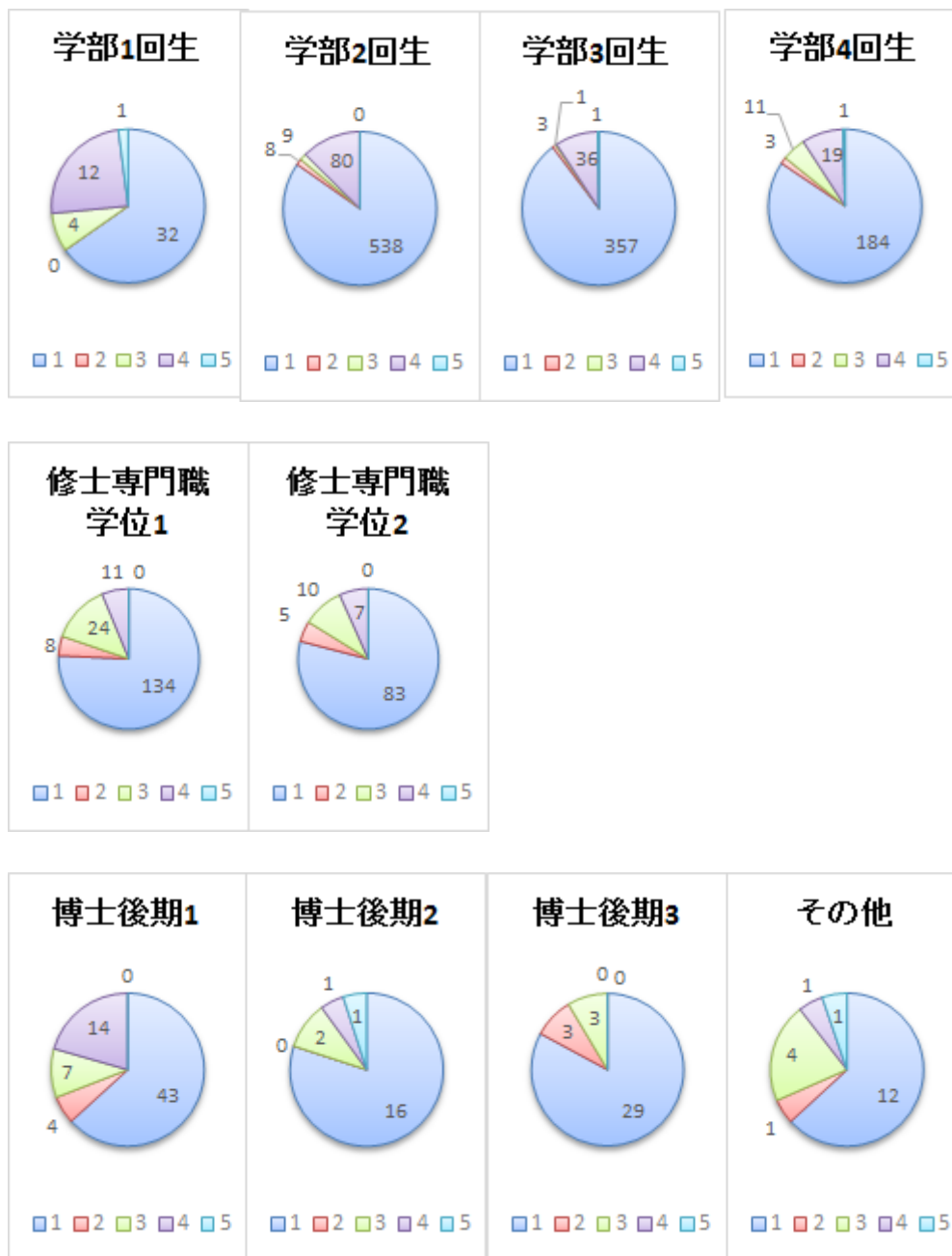


図3 学年ごとの「シラバスの活用法」（数字は回答人数。「シラバスを活用した」と回答した者のみを対象）。

1 = 科目選択・履修登録, 2 = 予習・復習, 3 = 授業中, 4 = 試験・レポート, 5 = その他。

## (2) シラバスの情報は十分なものでしたか

この設問に「はい」と答えた者は「96.2% (のべ数 2147 人, 無効回答を除く) にのぼり、ほとんどの学部生・院生がシラバス掲載情報に満足している事実が明らかとなりました。この数年間、授業担当教員はシラバスの形式の統一化と提供内容を充実させる工夫を重ねてきました。今回の結果は、こうした改善努力にたいして一定の成果がみられたといえるでしょう。

「いいえ」と答えた者はきわめて少数 (85 人, 3.5%) でしたが、その母集団のうち、不十分とした理由は「授業計画と内容 (32.4%)」、「成績評価の方法・基準 (28.8%)」、「授業の概要・目的 (23.4%)」が多いことがわかりました (図4)。

つぎに学年別にみると、情報は十分であったと回答した者が圧倒的に多く、顕著な学年差はみられませんでした (図5)。情報が不十分と回答した理由については、学年別のサンプル数が少ないため、ここから一定の傾向を読み取ることはできませんでした。

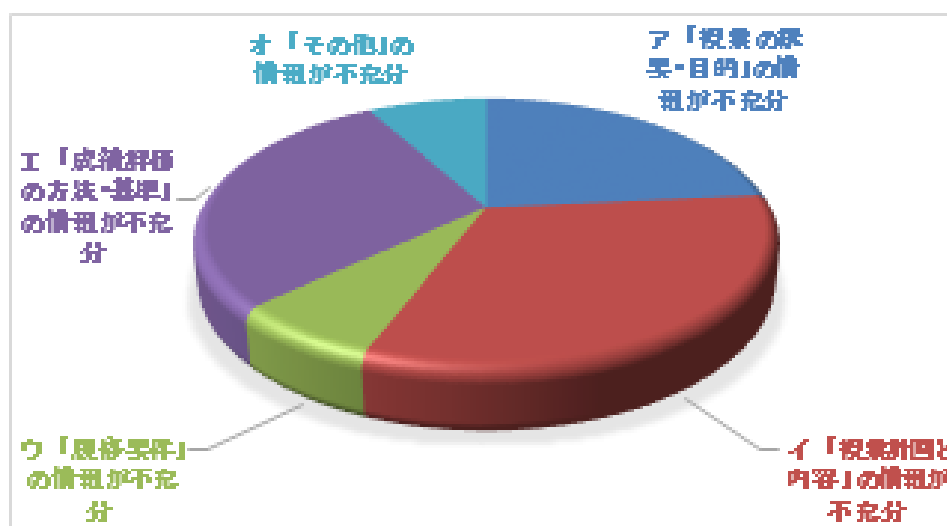


図4 シラバス情報の満足度 (「いいえ」と答えた回答のみ, 全体)

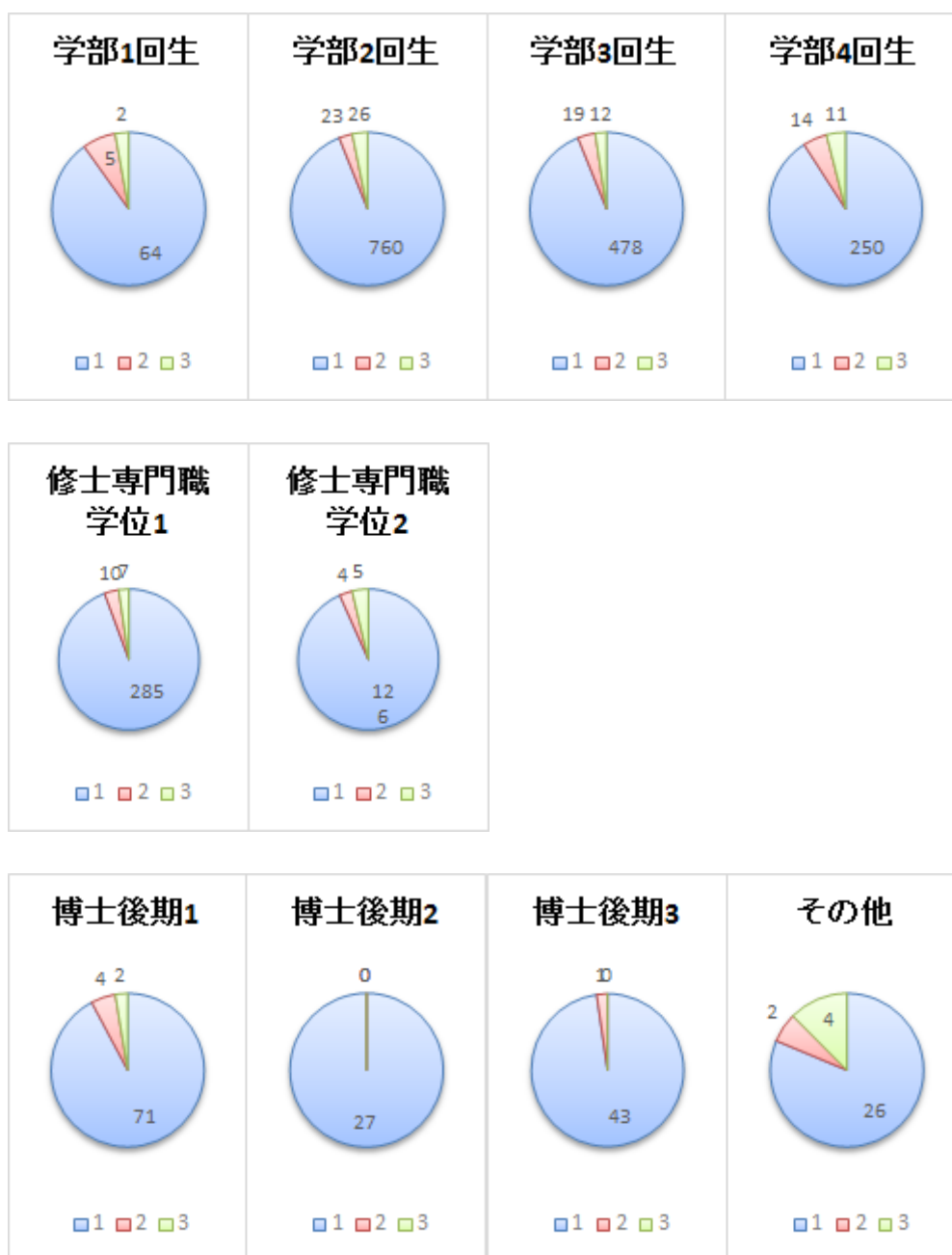


図5 学年ごとの「シラバスの満足度」（数字は回答人数）。  
1 = はい， 2 = いいえ， 3 = 無効回答。

### (3) シラバスの活用状況についての考察

今回の授業評価アンケートから、以下の3点が明らかとなりました。

- ① 多くの学部生・院生がシラバスを活用（使用）している
- ② ①の多くは、科目選択・履修登録をするときにシラバスを活用している

③ ほとんどの学部生・院生は、現在のシラバスに記載されている情報に満足している

ただし、いかえると約3割の学部生・院生がシラバスを十分活用（使用）していなかったということもできます。また、いったん授業が始まるとシラバスを参照する機会はほとんどなくなっているという事実も判明しました。今後は、授業期間さらには授業終了後も継続的にシラバスが有効活用される方法を検討していく必要があります。

## 【質問2】学習時間について

### (1) 授業出席回数

ここでは、教育学研究科・教育学部開講科目のうち、授業評価アンケート対象の各科目における全受講生、すなわち、教育学研究科・教育学部に所属する受講生だけでなく、他研究科・他学部にも所属する受講生も含め、全学年の受講生を対象に当該科目の授業出席回数について回答を求めました。その際、通年科目は1～30回、後期科目は1～15回のうち、出席した回数の数字を回答してもらいました。

#### 通年科目（全体）

通年科目の授業出席回数についての、全所属および全学年の受講生による回答総数（のべ人数）は428人でした。そのうち、無効回答8人を除く、有効回答総数は420人でした。この回答をもとに、授業出席回数1回から30回までの人数分布と、平均出席回数を算出しました（表1）。

表1 通年科目の授業出席回数（すべての学年/所属を含む）

《通年科目》

1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回	10回	
2	0	1	0	2	2	1	4	4	23	
0.48%	0.00%	0.24%	0.00%	0.48%	0.48%	0.24%	0.95%	0.95%	5.48%	
11回	12回	13回	14回	15回	16回	17回	18回	19回	20回	
6	9	6	6	34	2	1	6	2	35	
1.43%	2.14%	1.43%	1.43%	8.10%	0.48%	0.24%	1.43%	0.48%	8.33%	
21回	22回	23回	24回	25回	26回	27回	28回	29回	30回	無効
5	5	6	29	45	37	25	28	25	69	8
1.19%	1.19%	1.43%	6.90%	10.71%	8.81%	5.95%	6.67%	5.95%	16.43%	

通年科目の全体の平均出席回数は22.57回で、全授業回数を30回とすると70%、すなわち3分の2以上の出席率であったことがわかります。実際の授業出席回数の人数分布を見ても、授業回数の3分の2以上の出席にあたる、20回から30回の人数が309人/420人と全体の73.57%を占めており、平均値が見かけの数値でなく実質を示していることが伺えます。とくに、最頻値が39回の69人、次点が25回の45人、次々点が26回の37人と、全授業回数の8割以上の出席回数に分布のピークがあり、8割以上の出席率にあたる24回以上の出席人数



は、258人/420人と、全体の61.43%を占めています。通年科目の全体としての出席回数ばかりは、258人/420人と、全体の61.43%を占めています。通年科目の全体としての出席回数はきわめて良好であったといえます。

### 後期科目（全体）

後期科目の授業出席回数についての、全所属および全学年の受講生による回答総数（延べ人数）は1873人でした。そのうち、無効回答55人を除く、有効回答総数は1818人でした。この回答をもとに、授業出席回数1回から15回までの人数分布と、平均出席回数を算出しました（表2）。

表2 通年科目の授業出席回数（すべての学年/所属を含む）

《後期科目》

1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回	10回	
0	3	8	7	16	14	34	46	66	262	
0.00%	0.17%	0.44%	0.39%	0.88%	0.77%	1.87%	2.53%	3.63%	14.41%	
11回	12回	13回	14回	15回	16回	17回	18回	19回	20回	
182	295	318	247	320	0	0	0	0	0	
10.01%	16.23%	17.49%	13.59%	17.60%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	
21回	22回	23回	24回	25回	26回	27回	28回	29回	30回	無効
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	55
0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	

後期科目の全体の平均出席回数は12.09回であり、全授業回数15回とすると、8割以上の出席率となっていました。実際の授業出席回数の人数分布を見ても、最頻値は15回の320人、次点は13回の318人、次々点は12回の295人と、やはり全授業回数の8割以上の出席回数に分布のピークがありました。さらには、授業回数の3分の2以上の出席にあたる、10回から15回の人数にいたっては1624人/1818人、すなわち全体の89.33%にもおぼろ、9割近くを占めることがわかりました。後期科目の全体の出席回数についても、きわめて良好であったといえます。

### 通年科目（学年別）

通年科目の授業出席回数についての総回答人数420人のうち、学年が不明な4人を除いた416人のデータをもとに、学年別集計を次のようにおこないました。対象の受講生の所属は不問で、学年については、【質問1】での分析と同様に、学部1回生～4回生、修士課程1回生・2回生、博士後期課程1回生～3回生、その他、に分類しました。各学年について、当該科目の授業出席回数、1回から30回までの人数分布、無効回答数、有効回答数（のべ人数）、平均出席回数について算出しました（表4・上段）。

#### (a) 学部生： 通年科目

学部生の平均出席回数は、学部1回生29.0回（出席率96.67%、但し回答人数2人）、学部2回生23.4回（78%）、学部3回生21.0回（70%）、学部4回生19.2回（64%）と、授業回数30回のほぼ3分の2以上でした。実際の出席回数分布を見ると、とくに学部1～3回生については、最頻値および次点、次々点が25回以上に集まっており、授業回数30回の3分の2以上にあたる20回以上の出席人数にいたっては、学部1回生2人/2人（100%）、学部2回生93人/107人（86.92%）、学部3回生101人/122人（82.79%）と8割をはるかに超えており、学部1～3回生の通年科目への出席状況はたいへん良好であったことがわかりました。それに対し、学部4回生の出席回数の最頻値は授業回数30回の3分の2にあたる20回であり、20回以上の出席人数は25人/38人（65.79%）でした。学部4回生の通年科目への出席状況は、学部3回生以下のデータと比べるとやや数値は下がりました。ここからは、学部4回生は卒業論文作成のための研究活動や、就職活動や大学院受験等の進路決定に向けての諸活動等をこなしながらできるかぎり授業に出席しようとしていたことが伺えます。こうした点を考慮すると、4回生の授業出席回数（出席率）は決して低いと評価することはできず、少なくとも3分の2以上の出席回数は充たそうとする努力や意欲がみとれます。

#### (b) 修士課程： 通年科目

修士課程1回生については、平均出席回数は、1回生は20.9回（出席率69.67%）と授業回数30回のほぼ3分の2でした。一方、修士2回生については、平均出席回数は15回であり出席率50%に留まっていました。但し、このデータに関しては、以下のような問題点があると指摘できます。例えば、1回生に関しては、出席回数の最頻値は全出席の30回（20人/72人）でしたが、次点は5割出席の15回（17人/72人）であるというような、極端な二峰性の分布が見られました。また、他の学部生や博士後期課程の院生と比べても、出席回数の分布がより広範囲にわたっていることも明らかとなりました。

これらの点について、ローデータを調べてみたところ、講義・演習形式の授業形態をとる通年科目、講義形式の授業形態をとらない通年科目、集中講義形式あるいは一部集中講義形式を含む通年科目のそれぞれについて、「授業回数」の入力値が受講生によって極端に分かれていることが判明しました。講義・演習形式の授業形態をとる通年科目の中には、実際の出席率が100%に近い科目においても、入力値が30回の場合と15回の場合が見られるものもあり、この場合は、アンケートの時期が後期であったため、通年科目であっても後期分のみ出席状況を回答するものと「勘違い」して回答した院生が一定数いたようです。また、講義形式の授業形態をとらない通年科目、集中講義形式あるいは一部集中講義形式を含む通年科目については、時間数を「出席回数」に換算する方法についての統一や周知が不徹底であったために、受講生が何を出席回数とするかを各々の解釈で回答してしまった可能性があります。したがって、今回の修士課程の院生から得たデータについては、当該科目への実際の参加時間数や取り組み時間数を正しく反映していない可能性が高く、ここに掲載されている集計値よりもさらに多かったと推測できます。

### (c) 博士後期課程： 通年科目

博士後期課程の平均出席回数は、1回生21.6回（出席率72%）と2回生23.3回（77.67%）については、授業回数30回の3分の2以上、出席率にして7～8割近くに及んでいる。実際の授業出席回数の分布を見ても、授業回数30回の3分の2以上にあたる20回以上の出席人数は、1回生16人/23人（69.57%）、2回生8人/11人（72.73%）とほぼ7割を占めており、博士後期課程の1回生・2回生の通年科目への出席状況は良好であったといえます。他方、3回生の平均出席回数は14.0回（46.67%）で、実際の出席回数分布を見ると、20回以上の出席人数は2人/11人（18.18%）と、受講生の8割以上が出席回数20回未満である。そもそも、博士後期課程の学習方法の中心は、授業よりも専門分野における自らの研究そのものや研究にまつわる諸活動を通しての探究ですので、博士後期課程の3回生ともなると、通年科目の内容や性質によっては、あるいは通年科目という性質のために、学習方法として授業の受講という形式を選択しない度合いが高まると解釈できます。

### 後期科目（学年別）

後期科目の授業出席回数についての総回答人数1818人のうち、学年が不明な15人を除いた1803人のデータをもとに、学年別集計を以下のように行いました。対象の受講生の所属は不問で、学年については、学部1回生～4回生、修士課程1回生・2回生、博士後期1回生～3回生、その他、に分類しました。各学年について、当該科目の授業出席回数1回から15回までの人数分布、無効回答数、有効回答数（のべ人数）、平均出席回数について算出しました（表4・下段）。

#### (a) 学部生： 後期科目

学部生の後期科目への平均出席回数は、学部1回生12.4回（出席率82.67%）、学部2回生12.3回（82%）、学部3回生11.4回（76%）、学部4回生11.7回（78%）と、全体に7.5割以上8割強という高い出席率でした。実際の出席回数分布を見ても、いずれの学年も、最頻値および次点、次々点が10回以上に集まっていて、授業回数15回の3分の2以上にあたる10回以上の出席人数にいたっては、1回生58人/68人（85.29%）、2回生627人/678人（92.48%）、3回生317人/381人（83.20%）と、受講生の8割から9割以上と非常に高い割合を占めていたことから、学部生の後期科目への出席状況はきわめて良好であることがわかりました。

#### (b) 修士課程： 後期科目

修士専門職の後期科目への平均出席回数は、1回生12.8回（出席率85.33%）、2回生12.2回（81.33%）であり、全体に8割強から8.5割以上という非常に高い出席率でした。実際の出席回数分布を見ても、いずれの学年も、最頻値および次点、次々点が10回以上に集まっており、授業回数15回の3分の2以上にあたる10回以上の出席人数にいたっては、1回生206人/220人（93.64%）、2回生92人/105人（87.62%）と、受講生の9割近くから9割5分近くと非常に高い割合を占めており、修士課程の院生における後期科目への出席状況はきわめて良好であったことがわかりました。

(c) 博士後期課程： 後期科目

博士後期課程の後期科目への平均出席回数は、1回生12.7回（出席率84.67%）、2回生13.8回（92%）、3回生11.5回（76.67%）であり、全体に7割5分から9割以上という非常に高い出席率でした。実際の出席回数分布を見ても、いずれの学年も、最頻値および次点、次々点が10回以上に集まっており、授業回数15回の3分の2以上に当たる10回以上の出席人数にいたっては、1回生50人/53人（94.34%）、2回生15人/16人（93.75%）、3回生25人/30人（83.33%）と、受講生の8割強から9割5分近くと非常に高い割合を占めており、博士後期課程の院生における後期科目への出席状況はきわめて良好であったことがわかりました。

(2) 授業出席回数についての考察

教育学研究科・教育学部提供科目の受講生の授業出席状況については、通年科目・後期科目ともに、所属や学年を問わず全体にわたってたいへん良好であったといえるでしょう。ただし、とくに修士課程院生からのアンケート回答については、講義形式でない授業科目や集中講義科目など「授業出席回数」として回答することが難しい場合に、実際の当該科目への参加状況や取り組み状況が反映された回答とは言いがたい入力値が多数みられました。今後は、実態が正確に反映されるよう教示等を工夫するなど、アンケート実施方法を改善する必要があります。

表4 学年ごとの授業出席回数（上段：通年科目，下段：後期科目）

◀通年科目▶																																		
	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回	10回	11回	12回	13回	14回	15回	16回	17回	18回	19回	20回	21回	22回	23回	24回	25回	26回	27回	28回	29回	30回	無効	延べ人数	平均	
学部1回生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2	29.0	
学部2回生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	0	2	0	1	4	0	0	1	0	7	1	1	4	7	12	16	9	12	7	17	1	107	23.4
学部3回生	0	0	0	0	1	0	0	1	1	6	1	3	3	0	1	0	0	2	2	9	4	2	1	8	20	9	10	9	12	17	1	122	21.0	
学部4回生	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2	0	1	1	1	2	1	1	2	0	11	0	1	0	3	3	3	0	1	1	2	2	38	19.2	
修士専門職1	2	0	0	0	1	1	0	2	0	3	0	1	0	1	17	0	0	0	0	5	0	0	0	5	3	4	3	3	1	20	1	72	20.9	
修士専門職2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3	1	0	1	2	3	1	0	1	0	3	0	0	1	0	0	1	3	0	3	0	0	24	15.0	
博士後期1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	1	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3	2	0	2	1	6	0	23	21.6
博士後期2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	5	0	11	23.3
博士後期3	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3	2	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	11	14.0	
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	1	0	0	0	0	0	6	19.8	
全体	2	0	1	0	2	2	1	4	4	23	6	9	6	6	33	2	1	6	2	35	5	5	6	29	43	37	25	28	25	68	6	416	20.8	
割合	0.5%	0.0%	0.2%	0.0%	0.5%	0.5%	0.2%	1.0%	1.0%	5.5%	1.4%	2.2%	1.4%	1.4%	7.9%	0.5%	0.2%	1.4%	0.5%	8.4%	1.2%	1.2%	1.4%	7.0%	10.3%	8.9%	6.0%	6.7%	6.0%	16.3%				
◀後期科目▶																																		
	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回	10回	11回	12回	13回	14回	15回	16回	17回	18回	19回	20回	21回	22回	23回	24回	25回	26回	27回	28回	29回	30回	無効	延べ人数	平均	
学部1回生	0	0	0	0	0	0	3	4	3	6	3	6	10	27	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	68	12.4
学部2回生	0	0	0	1	6	2	4	14	24	82	78	118	150	101	98	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	678	12.3
学部3回生	0	0	3	2	6	9	11	14	19	69	43	68	60	45	32	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	381	11.4	
学部4回生	0	0	1	1	0	2	8	8	8	49	25	34	40	28	25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	229	11.7	
修士専門職1	0	0	2	2	2	0	3	2	3	22	14	35	35	18	82	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	220	12.8	
修士専門職2	0	1	1	1	2	0	3	0	5	17	3	21	7	15	29	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	105	12.2	
博士後期1	0	1	1	0	0	1	0	0	0	5	7	5	8	2	23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	53	12.7	
博士後期2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2	0	2	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	16	13.8	
博士後期3	0	1	0	0	0	0	1	0	3	9	4	1	0	2	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	30	11.5	
その他	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	3	2	6	5	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	23	12.6	
全体	0	3	8	7	16	14	34	44	66	260	180	292	316	245	318	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	43	1803	12.1		
割合	0.0%	0.2%	0.4%	0.4%	0.9%	0.8%	1.9%	2.4%	3.7%	14.4%	10.0%	16.2%	17.5%	13.6%	17.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%			

### (3) 授業外学習時間について

教育学研究科・教育学部提供科目の受講生への授業評価アンケート回答総数2315人に、授業以外の学習時間について回答を求めました。全体の平均値は3.54時間であることがわかりました。また、学年別の平均授業外学習時間を表5にまとめました。

学部生は学部2回生が1.7時間ともっとも少なく、学部1回生2.5時間、3回生2.6時間であり、4回生3.5時間が最も多いことが示されました。修士課程の院生では1回生4.4時間、2回生7.2時間でした。博士後期課程の院生では、2回生が最も少なく0.9時間、次いで1回生4時間、3回生5.9時間でした。

これらの結果について、学部生、修士課程、博士後期課程を単純に比較することは到底できません。しかし、必修単位数を揃えねばならない学年では、総じて自習時間が短くなる傾向にあることが読み取れます。但し、これらのデータについても、何を「授業以外の学習時間」に含めるかについては学生によって解釈の幅があるようです。とくに、大学院生は専攻する分野によって実験・調査・実践等の研究・探究活動に多くの時間をとられているはずですが、これらの時間数を含めている者、含めていない者で回答に大きな違いがでてきた可能性があります。学生達の実際の「自学自習」における「研究・探究」の取り組み状況について正しく把握するため、今後は、アンケート中の問いの目的と教示等をより明確化するなどの工夫が必要であるという課題がみえてきました。

表5 各学年にみる授業外学習時間

学部1回生	2.54 時間
学部2回生	1.68 時間
学部3回生	2.63 時間
学部4回生	3.50 時間
修士専門職学位1	4.42 時間
修士専門職学位2	7.17 時間
博士後期1	4.03 時間
博士後期2	0.94 時間
博士後期3	5.93 時間
その他	7.97 時間

### <3. おわりに>

今回、はじめて本部局が提供するすべての授業科目を対象としたアンケートを実施することができました。調査に参加、ご協力いただいた多くの学部生、院生のみなさん、アンケート実施にあたり、授業時間をさいて全面的にご協力いただいた授業担当教員の皆様に御礼申し上げます。また、2014年度授業評価アンケートを作成してくださった2014年度自己点検・評価委員会の駒込 武 委員長、岡野憲一郎 先生、服部憲児 先生、またデータ分析にあたって力を尽くしてくださいました教務掛 中尾知里掛長、総務掛 古屋比奈掛長をはじめ、各部署の職員の皆様に厚く御礼申し上げます。

今回のアンケート結果で明らかとなった重要な点のひとつは、学部生・院生のみなさんの多くが、授業選択や主体的な学習のための一助としてシラバスを活用している事実が確認できたことです。シラバスには、未知の世界への探究心をかきたてる情報がつまっています。同時に、みなさんの知的好奇心をただやみくもに高めるだけでなく、授業期間内に何が具体的に提供され、どこを到達目標としているのかを具体的にイメージさせながら主体的な学習、探究活動を実質的に導く、支援するという重要な役割も担っています。みなさんが大学、大学院で探究心、発想力や創造力、課題解決能力等を伸ばし、新たな「知」の創造者になってくれること、そして、社会や人類の将来に貢献する人材へと成長してくれることを期待しながら、教員はいつそう工夫、洗練された授業計画、シラバス作成を試みていきます。

また、学部生・院生の授業への出席率が予想をはるかにこえて高いという事実も、今回のアンケートによって明確になりました。この傾向は、教育学部・教育学研究科の学生にのみあてはまるのか、あるいは京都大学に在籍する学部生・院生全般に共通する特徴なのかは今後検討の余地がありますが、みなさんが日々の生活のなかで授業を重視し、時空間を教員、同士と共有したいという強い動機のもと授業に臨まれていることを伺い知ることができました。今回の授業評価アンケートの分析結果は、本部局の教員全員にすでに周知、共有されています。今回のアンケートの結果によって明らかとなった事実を教員の側も知ることによって、授業における両者の対話、相互理解はいつそう深化するはずで

京都大学では、日本のみならず世界最先端に位置する現役の研究者が、学問の魅力を「生の声で・リアルに」伝える貴重な場です。こうした貴重な機会を、みなさんが京都大学・大学院に在籍している間に存分に堪能し、将来の歩みに生かしてもらうため、また教員の側も最先端の人類の知をみなさんに届ける努力を継続するため、学部生・院生と教員間での「授業評価—フィードバック—改善」の動的、双方向的ループを、今後も維持、改善していくことが大切です。

(2015年度 自己点検・評価委員会 委員長 明和政子)



